

2020 年 10 月 26 日(月)

コロナ禍のもとでいかに対応してきたか(2020 年 10 月まで)

群馬大学 電子情報部門 小林春夫・桑名杏奈 研究室

一灯をさげて暗夜を行く。暗夜を憂うなかれ、一灯を頼め。

国学者 佐藤一斎「言志晩録」

- 現在世の中の人々が求めているのは、1-2年後を現在のデータをもとに「線形予測」をする論だけではないと思う。二宮尊徳が、茄子の味からその年の冷夏・不作を直感し、適切な対応によりその村の飢饉を避けることができたという話が伝わっているが、今求めているのは未萌を見るようなことであろう。
- 学生達は自分が論文を書き外部発表(現在すべてオンラインで)するとなると、また共著者になると非常にモチベーションが上がるのを強く感じる。今年の3月から12月までに発表・採択されている国際会議論文は研究室から30件程度である。国際学会によっては論文採否通知に査読者のコメント、点数が付いているものがある。そこからすると、論文委員会で採否をめぐって激論(?)がかわされたかもしれないと推定できるものもあったが、今回はかろうじてツキがあったようだ。

<https://kobaweb.ei.st.gunma-u.ac.jp/gakkai.html>

さらに これから下記の国際会議でも数件論文投稿予定である。

<http://conf.e-jikei.org/ICTSS/2020/>

こう書いている現在も該当学生から問い合わせがある。「啓発」のもとになった次の言葉が思い起こされる。

「憤せずんば啓せず。非せずんば発せず。一隅を挙げてこれに示し、三隅を以て反えらざれば、則ち復たせざるなり。」(論語)

オンラインの国内研究会でも学生が5件発表した。一部感想を書かせている。

https://kobaweb.ei.st.gunma-u.ac.jp/news/pdf/2020/ECT-report_shuhei.pdf

これらの原稿作成や発表練習・発表を聴くと学生のすごいエネルギーを感じる。「Education(教育)の Educate の語源は 能力を引き出すこと」、「英語でのプレゼンテーション教育」「アクテブラーニング」等の教育の哲学や手法がとなえられているが、自分は外部発表が最も効果的なやり方であると認識した。

- 共同研究先の企業さんによる発表でも、担当の方のすごいエネルギーを感じる。「教員」という職業の者としてぜひ協力したいと思っている。

- 共著の論文発表でも共同研究者は共著論文原稿や学生発表スライドの完成度を上げるため様々なアドバイスをくれる。「複数の人たちで仕事をするときには情報の伝達や議論は口頭ではなくドキュメントをベースにして行う」ということが論文原稿、スライドを用いて実行できている。完成度を上げるためのやり取りを通じた技術的な課題が明確になり新しいアイデアが出てくることもしばしばある。
- 「大学での客観的な教育の質の評価」の議論があるが、外部発表を学外の方に聴いてもらえば達成できよう。また、このような状況下では学生のメンタル面、引き籠りが心配であるが、その可能性が大幅に低減できると思う。
- 教員にとっても、学生のレポートの添削よりも論文の添削のほうが(学会データベースに残るので)ずっとモチベーションがありきわめて真剣になる。
- セミコンジャパン(今年は Virtual)から研究室として出展の招待を受ける。ここ数年続いており地方大学の一研究室としてはありがたい話である。学生に展示ポスターの作成を依頼したが、自分たちが大きな展示会でアピールできるというので、意欲が湧いているようである。

<https://www.semiconjapan.org/jp/home>

重要な良い仕事の権限を委譲することで周りを活性化できる。

- 群馬大学アナログ集積回路研究会での公開講演会はオンラインで提供しているため外部からの参加者が増えている。産業界の回路技術者だけでなく、他大学や国立の研究所の物理関係の研究者の方々の参加もある。結果として「ピンチをチャンスに」となっている。次のメールをいただき、環境激変に対して適応できている感じた。

「源代裕治先生のシラバスには毎年興味を引かれているのですが、桐生までかけて拝聴するわけにもいかず、今年はよい機会なので一度拝聴させていただきたいと思います。」

群馬大学非常勤講師 飯野俊雄先生

<https://kobaweb.ei.st.gunma-u.ac.jp/analog-web/analogworkshop.html>

<https://kobaweb.ei.st.gunma-u.ac.jp/lecture/lecture.html>

- このような状況下では これまでの「信用」「信頼」「ブランド」「権威」等の価値観への影響が大きいと思う。何もしない、何もできなければ 従来のこれらのものから人の心は去り、新しい価値観へ移っていくことは歴史書を紐解けば分かる。
- 対面の重要性も実感する。研究室学生と対面で話をするとその学生に対する研究テーマを思いつくことが多い。一方これまで対面の講義、スライドだけでなく板書も重要という(今から見れば)言い訳から作成講義資料が甘かったところ多々あると気が付く。講義の全面オンライン化のもとに時間をかけて講義資料だけで伝わるように講義スライドを強化している。
- 研究テーマは、自分がこれまで理解が中途半端であったので完全に理解したいというものを選ぶことが多い。ある程度知っているので研究指導ができるし、自分がよく理解したいというモチベーションがある。また、これまでの関連文献を Google Scholar 等で徹底的に調べ、ここが足りないから研究しようというより、敢えて文献は読まず自分で考えてやってみる、まとまっ

た結果がでたら関連文献を調べ対比する ということが多い。最初に文献を読んでしまうと、考えがその影響をうけてしまうからである。結果として似たような研究をしてしまうこともあるが、やはり違うところもある。徹底的に論文を調査してからというのは年齢的にもきつくなってきている。(たくさんの論文を読破するパワーがなくなってきている。)

「学を断てば憂いなし」(老子)

- オンラインでのイベント参加、動画を見るが多くなった。効率的に情報が得られる。研究会・学会発表や外部講師の先生の講義・講演をオンラインで視聴するだけでなく、米国系企業も含めて産業界のセミナーも視聴する。技術情報を得ると同時に、どのようなやり方をしていくか参考にしたいためである。
- 「(紙の)本を読む」ことの良さも実感する。通勤の電車中で、また医院での待ち時間等では本を読んでいるが、読後感が非常に良い。一方 次も正しいであろう。

「悉(ことごと)く書を信ずれば書無きに如かず」(孟子)

- 結果として、現時点までではコロナ禍による環境激変を逆手にとり、研究室の研究・教育・対外活動は(これまでの自分のところと比較して)大きな成果を上げていると思う。大学では「研究室」を越えなければやりたいことを迅速にできる。

研究教育機関で最も効果的なことは「外部発表をすること」であると実感している。

関係 WEB

- ※[群馬大学 小林・桑名研究室 韓国での国際会議に見参 ISOCC2020 プログラム](#)
- ※[コロナ禍のもとでいかに対応してきたか \(2020年9月まで\)](#)
- ※[コロナ禍のもとでいかに対応してきたか \(2020年8月まで\)](#)
- ※[バーチャル国際会議参加記](#)
- ※[コロナウィルス影響で激変する環境に如何に対応すべきか](#)
- ※[地方の文化を享受](#)

文責 小林春夫